

新たな視点の学術活動

滝沢茂男¹

¹文部科学省科学研究費助成事業指定研究機関

バイオフィリア研究所

3年を経た国際学会の再開にあたり、筆者がこの研究に従事した時の考えとその後の研究から理解を深めた内容について、基礎研究からの転換も求められているため報告する。

基礎研究に関する事実は、自立的運動リハビリテーション（タキザワ式）の施術により、寝たきり状態から5割の人が何らかのレベルの歩行を獲得し自立度が高まった事実を確認したことから始まっている。インペアメント・解剖学的機能損傷をすなわち障害を克服して生活を樹立させ得ることを示している。この事実を確認し、筆者は介護がなくても皆が安心して暮らせる社会を作ると決意し、この研究に従事した。

これは神奈川リハビリテーションセンター病院等で治療を受けた後に、機能回復することない患者をストレッチャーで送る旧制度の介護強化病院において起きたことであり、この事実については特に歩行再獲得の確認については臨床整形外科医師が1998年に臨床整形外科学会誌に査読論文¹⁾として発表している。

その社会確立には障害をそれぞれの人が克服して生活を自立できることが重要である。筆者はその実現可能性を信じ、タキザワ式の機序の解明に努めてきた。

その実現のためにはタキザワ式を一般化する必要があり、九州で行った導入試験²⁾では自立度が高まった。このように、一定の成果が得られ国際リハビリテーション医学会のISPRM2019神戸ロングワークショップ³⁾、ポーランド科学アカデミーと日本学術振興会の共同の選考を経た研究成果の発表会⁴⁾を実施できた。このような研究の実績から、今回量産型開発について、2000年に通商産業省関東通商産業局・NEDOのベンチャー企業支援型地域コンソーシアム研究を申請して以来、申請を繰り返した量産型機器の製造開発について事業再構築補助金を獲得した。

このような状況を踏まえ、これまでの基礎研究が成功裏に終了した時点で、筆者の研究に従事した時の考えを報告することは、大きな価値があるものと考えている。

以下の3点で、報告の形で明らかにする。

- 1, 社会に対して我々の研究がどのような意味を持つのか
- 2, 医師と社会の関わり合いについて
- 3, 機器開発とその委員について

そしてこれらの報告・提案はただ単なる技術や医療のみではなく、社会全体を俯瞰して人々の死生観を問い直すもの、それに伴う社会保障費の分配に関する考え方についての提案を含んでいる。

この報告が次世代の青年たちにとって福音となることを願っている。

参考文献

1. 木島英夫, 飯塚健児, 今井重信, 加藤俊明, 渡辺仁美, 金井司郎, 滝沢恭子, 滝沢茂男、我々のすすめているリハビリテーションと関連訓練器について一、臨床整形外科医会誌第58号,

pp186-191, (Vol. 23, No. 2 到 NE1998) (査読あり)

2. 滝沢 茂男, 武藤 佳恭, 石丸 知二, 和田 里佳, 高田 一, 木村 哲彦, 高齢障害者自身による地域リハ・ネット構築と自律リハ実施効果の研究, バイオフィリア リハビリテーション研究, Vol. 6 (2010) , No. 1, pp11-18 (査読あり)
3. Super Aged Community: Role for Community Based and Primary Rehabilitation Care Chairs: Shigeo Takizawa [Japan], Yoshiko Morita [Japan], Walter R Frontera [United States], Long Workshop 7, ISPRM 2019, Kobe, June 9, 2019
4. 滝沢茂男、ポコルスキ ミェチスワフ グジェゴシュ, リハビリテーション医学のパラダイムシフト: 創動運動による障害克服、二国間交流事業 共同研究・セミナー | 日本学術振興会 (jsps.go.jp) 令和2年度

https://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/data/r2/seminar/220204601_5.pdf